

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520217

研究課題名（和文） 南部アグレーリアンの「伝記」作品に関する文化史的研究

研究課題名（英文） A Cultural-historical Study of Biographies by Southern Agrarians

研究代表者

小谷 耕二（KOTANI KOJI）

九州大学・大学院言語文化研究院・教授

研究者番号：40127824

研究成果の概要：アレン・テイトのふたつの伝記、『ストーンウォール・ジャクソン伝』と『ジェファソン・デイヴィス伝』、およびライトルの『ネイサン・ベッドフォード・フォレスト伝』は、対象となった人物の生涯や業績、人物像を描きだす以上に、それぞれ作者テイトやライトルについて多くを語るものとなっている。そこから浮かびあがってくるのは、両者の旧南部の伝統への愛着と、産業化された北部社会およびそこでの人間のあり方への批判であり、その意味で両者の伝記作品は、南部文芸復興初期におけるモダニズム＝近代批判のひとつの典型的なありようを示すものであった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	330,000	1,930,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：南部アグレーリアン、アレン・テイト、アンドルー・ライトル、伝記論、近代批判

1. 研究開始当初の背景

（1）昨今、ポストモダン思想の「言語論的展開」によりフィクションと歴史の境界が流動化し、歴史叙述の方法や意義の再検討、創

造行為としての記憶の再定義などの動きが顕著に見られる。このような流れを踏まえつつ南部アグレーリアンの伝記作品を考察してみる必要があるのではないかとというのが

本研究に取り組む背景にあった。

(2) 「南部文芸復興」の一翼を担った南部アグレーリアン（農本主義者）と称される詩人・作家のうち、アレン・テイト、アンドルー・ライトル、ロンバート・ペン・ウォレンがその文学的生涯のはじめに一様に歴史上の人物の伝記を書き、それから詩や小説に本格的に転じていったのは興味深い暗合である。フィクションや歴史の境界の流動化という視点を導入すれば興味深さは倍加する。彼らが伝記作品を最初に手がけた動機はなにか、また詩や小説に転じた成りゆきの必然性はいかなるものであったのか、あるいは伝記から詩／小説へという転回は本質的な意味で「転回」であったのか、伝記とはいっても創造行為としてフィクションに通底するものではなかったか等々、さまざまな疑問が浮かびあがる。それを考察してみようというのが本研究の動機だった。

2. 研究の目的

本研究は、南部アグレーリアンのうちテイト、ライトル、ウォレンが書いた伝記作品を取りあげ、各作家の文学的業績におけるその位置づけを考察し、ついでそこから彼らの「南部文芸復興」に占める位置を再検討しつつ、その時代思潮の基底にある思考や認識の枠組みを掘りおこすことを目的としている。

3. 研究の方法

研究課題の性質上、先行研究の調査、収集、解説、整理、伝記作品の解説、分析といった、資料収集と文献研究が基本的な研究方法となる。具体的な手順は以下のとおり。

(1) 南部文芸復興期の文学者、思想家の著作、および南部文化史・思想史関連の研究文献の調査・収集を行う。

(2) 研究課題としている伝記作品の対象と

なった歴史上の人物およびその生涯に関する基本的な歴史文献の調査・収集を行う。

(3) 伝記／自伝ジャンルおよび歴史叙述に関する理論的著作の調査・収集を行う。

(4) 研究目的に掲げた観点から、伝記ジャンルの理論的考察を行う。

(5) 上記(4)を踏まえつつ、研究目的に掲げた観点から、アレン・テイト『ストーンウォール・ジャクソン伝』および『ジェファソン・デイヴィス伝』、アンドルー・ライトル『ネイサン・ベッドフォード・フォレスト伝』、ロバート・ペン・ウォレン『ジョン・ブラウン伝』の解説を行う。

(6) 研究成果を報告書として冊子にまとめる。

4. 研究成果

トマス・ランダースという研究者によれば、テイトとライトルが伝記執筆に赴いた1930年前後は伝記が流行していた時代であったという。その意味で、経済的な要因が両者の伝記執筆に作用していたことは当然考えられる。

しかしもっと核心的な要因としては、1925年のスコープス裁判が挙げられるだろう。この裁判により南部の文化的な後進性が喧伝され、それはまたH.L.メンケンの痛烈な嘲罵の的となった。南部アグレーリアンはそれに対する反発として、南部の持つ伝統的な価値の見直しや、産業主義に基づいた北部社会における人間のあり方に対する懐疑と批判を表明することになった。この時期の南部の文化的自画像の揺らぎが、そこには存在していたと考えられる。そうした流れのなかで、テイトとライトルは旧南部の歴史上の人物を取りあげることによって、南部の文化的自画像の再発見や再確認、ひいては自らの拠って立つ場所の確立をめざしていたといえるだ

ろう。これが彼らの伝記執筆の主たる動機であった。

ところで、「言語論的展開」を閲したポストモダン思想は、歴史や自伝を書くという行為が実証的な資料に依拠した純粋に「客観的な」作業ではありえず、本質的に書く主体の主観的な物語構築／創造の行為であることを明らかにしている。伝記を書く場合も事情は同じであろう。事実、テイトやライトルの伝記には、対象となった人物の生涯や業績、人物像が描きだされているばかりではなく、作者自身の人間理解や歴史観あるいは世界像といったものが、顕在的にも潜在的にも織りこまれている。大井浩二がテイトに関して指摘しているように、彼らの伝記作品は、それを書いた彼ら自身の一種の自伝的サブテキストとしても読めるものとなっているのである。

アレン・テイトの『ストーンウォール・ジャクソン伝』においては、ジャクソンの信心深く、いささか融通が利かず、風変りな人物像のほかに、その戦略家としての卓抜さが強調されている。同時に、質素で飾り気のないその風貌や性格が、当該伝記の副題ともなっている「善良な兵士」のイメージを浮かびあがらせ、貴族的伝統とはまた別の旧南部の自画像を提示している。一方、北部の抽象的な「自由」や「平等」の観念を、人間の有限性に目を閉ざした根拠のない楽観主義としてテイトは批判している。テイトによれば、彼が尊崇するリー将軍は人間が道徳的には完璧な存在ではあり得ないことを理解していたがゆえに、それが軍人としての弱点にもなっていたのだが、そのことと考えあわせれば、テイトの北部批判は一面で彼の古典主義的人間観を示しているとみなすことができる。

また『ジャクソン伝』においてテイトはジ

ェファソン・デイヴィスの政治家としての無策ぶり、戦局を大局的に捉えることのできない無能さを批判している。この批判は『デイヴィス伝』においても持続しており、彼はデイヴィスのなかに理性の過剰ゆえの感情的未発達を見てとっている。これは歴史的現実を捨象した北部の思考の抽象性につながるものであり、そこでは産業化、近代化による人間の断片化が批判されている。

このように、テイトのふたつの伝記は彼の独自の歴史観や人間観、それにもとづく近代批判を反映しているのである。

アンドルー・ライトルの場合も基本的に事情は同じであり、彼がフォレスト将軍に見たものは、後年の作品で美化されつつ形象化されていく「独立自営農民」、およびその土地に根ざし、共同体に包まれた人間存在のあり方である。ライトルもフォレスト像をとおして旧南部のよき伝統を描きだし、そのことによって北部における産業主義、金銭第一主義による人間存在の衰弱化を指摘し、近代批判を展開しているのである。

当初予定していたロバート・ペン・ウォレンの『ジョン・ブラウン伝』に関しては、それがブラウン像を描きだす以上に、作者ウォレンについて多くを語るものであるという点では基本的構図は同じであるが、残念ながら詳細な考察を行なうまでには至らなかった。

今後は、南部の文化的自画像の持続と変遷という観点から、考察の対象を南部アグリーリアンの他の文学作品や評論に広げるばかりではなく、ウィリアム・フォークナー、W. J. キャッシュ、ハワード・オードラムといった同時代の文学者、知識人の著作を検討し、ここ2、30年来の新歴史主義的潮流やジェンダー的視点を適宜導入しつつ、包括的な南部文芸復興期研究を行うことが大きな課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 小谷耕二「恋するジョー・クリスマス―『八月の光』第8章を「短篇」として読む」『The Kyushu Review』12号、2008年、35―45頁、査読あり

[その他] (計1件)

- ① 小谷耕二「南部アグレーリアンの「伝記」作品に関する文化史的研究」未公刊原稿、2009年、A4版ワープロ原稿35頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小谷 耕二 (KOTANI KOJI)

九州大学・大学院言語文化研究院・教授

研究者番号：40127824